中期ビザンティン挿絵入りレクショナリーの聖者暦

益田朋幸・海老原梨江

益田は本稿に先立つ「中期ビザンティン・レクショナリー写本の挿絵研究序説」(1)において、挿絵入りレクショナリー写本研究の問題点を展望した。諸家のこれまでの研究は、挿絵のみをとり出して、図像学的に検討することが多かったが、写本の全体像を捉えるためには、テクストの記述、とくに後半シナクサリオンの聖者暦の分析が不可欠である。本稿では海老原の助力を得て、具体的な方法論の提唱と、いくつかの写本において実際の検討を行う。

ビザンティン学の諸領域において、聖者暦の比較研究は未開拓の分野である。挿絵入りレクショナリー写本研究にとって重要であるのみならず、聖堂壁画(2)、Menologion 写本挿絵等の研究にも不可欠である。また神学や歴史学にとっても新知見が得られよう(3)。益田は当面、「中期ビザンティン」「挿絵入り」レクショナリーという二重の限定をつけて調査を進めるつもりであるが、聖者暦という観点からは、挿絵の有無を問わず、写本のジャンル（レクショナリー、ミノロギオン等）にかかわらず、広くデータを蒐集すべきであろう。しかしそれは一個人の作業量を超える。

益田のこれまでの調査では、現存する中期ビザンティン時代（9~ 13 世紀前半）の挿絵入りレクショナリーは、以下の 18 写本である(4)。

・パトモス島聖ヨハネ修道院 Cod.70（10 世紀）
・サンクト・ペテルブルグ、国立図書館 Cod.gr.21 （10 世紀）
・アトス山ラヴラ修道院 Cod.A 86 (10 世紀）
・アトス山ラヴラ修道院 Skevophylakion 蔵写本（11 世紀）
・アトス山イヴィロン修道院 Cod.1（11 世紀）
・ワシントン、Dumbarton Oaks Cod.1（11 世紀）
・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 639（11 世紀）
・ヴァティカン図書館 Cod.Vat.gr.1156（11 世紀）
・アテネ国立図書館 Cod.190（11 世紀）

・ヴェネツィア、Istituto Ellenico, Cod.gr.2 （11 世紀）
・アトス山ディオニシウ修道院 Cod.587（11 世紀）
・アテネ、ベナキ美術館 Cod.TA 318= Proqhvkh 30.5 （11 世紀）
・アテネ国立図書館 Cod.68（11/12 世紀）
・パリ国立図書館 Cod.Suppl.gr.27（11/12 世紀）
・アトス山パンテレイモン修道院 Cod.2（12 世紀）
・イスタンブール、総主教座 Cod.8（12 世紀）
・ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Cod. M 692 （12 世紀）
・アトス山イヴィロン修道院 Cod.111m （13 世紀）

このうち聖者暦に関して基本的な調査の終了しているパリ本、ピアポント・モーガン本 692 番（テクストが十字形に記されているので、以下「十字架本」と略称）、ヴェネツィア本、ヴァティカン本を本稿の対象とする。分析の指針を以下に述べる。ビザンティン研究の基準となるのは、何より首都の文物であり、この場合はコンスタンティノポリスの聖者暦である。コンスタンティノポリス総主教座聖堂（大聖堂）たるアギア・ソフィアのティピコン（典礼規則書）が出発点とならなければならない。『大教会（アギア・ソフィア）のティピコン』には、移動日課、固定日課の二重システムに従って、毎日の典礼の内容が詳細に記録されている(5)。しかしその情報量の多さが、我々の分析には障害となる。あまりに多数の聖人を挙げるため、ほとんどの写本がその範囲内に収まってしまい、差異の体系を抽出しにくいのである(6)。

『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』(7)も、首都の標準的な聖者暦として重要である。これはレクショナリー後半部のシナクサリオンとは異なり、聖人の生涯に関する短いコメントを附した聖者暦で、10 世紀頃の成立と考えられる。しかしこれもまた多数の聖者を挙げるため、比較の基準とはなりにくい。

ミノロギオン Μηνολόγιον もまた普及した聖者暦の一ジャンルで、聖者の伝をカレンダーに従って抄したものである。このうちの代表的なものがシメオン・メタフラスティスの編纂にかかる版で、少なからぬ挿絵入り写本が N・P・シェヴチェンコによって出版されている(8)。これらの写本のテクストは同一であり、聖人の選択にヴァリエーションがある訳ではない。ただしどの聖人に挿絵をつけ、どの聖人を捨てるかという点で、写本間に多少の差がある。この点はレクショナリー挿絵を研究する際に、並行現象として検討する価値をもつ。

本稿で比較の基準として提唱したいのは、パリ国立図書館 Cod.Paris.gr.284 である。これを我々は、11 世紀のコンスタンティノポリス総主教座が実際に用いたレクショナリーであると考える(9)。総主教座レクショナリーが採用する聖人は、『大教会のティピコン』や『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』と比べて大幅に少なく、他の写本と比較したときに有意な差が出やすい。総主教座本と異なる暦を採る場合、それが正教会に対するいかなる関係を示すのか、未だ不明ではあるが、さしあたってこれを立脚点としつつ、挿絵入りレクショナリー4 写本を検討したい。これらの脇に、コロフォンによって年代・工房が確定される写本を並べて、同時に比較参照する。Cod.Paris.Suppl.gr.1096 は 1070 年にカルコプラティアの schole の Grammatikos たるペトロスの手になる写本である（以下「カルコプラティア本」）。総主教座もカルコプラティアも、ほとんど隣接する位置にあり、首都の中枢を担いながらも、その典礼の内容が微妙に異なっている点が興味深い。

本稿末尾には 6 写本の聖者暦を附す。これを分析したのが表 1 で、各写本の選択する聖人が一致する日数をまとめた。6 写本がすべて同一の聖人を挙げるのは 1 年のうち 104 日である。これを逆に言えば、1 年の 3 分の 2 は各教会・修道院で、異なる典礼が行われていることになる。十字架本を除いた 5 写本で祭日が一致するのが 99 日、パリ本と十字架本を除いた 4 写本で一致するのが 83 日となる。83 日中 30 日は、パリ本と十字架本が同じ聖人を挙げている。総主教座本を基準に考えると、各写本がこれと一致する日数は、パリ本 227 日、十字架本 129 日、ヴェネツィア本 323 日、ヴァティカン本 305 日、カルコプラティア本 317 日となる。

表 1　6 写本における聖人選択

A	B	C	D	E	F	日数
○	○	○	○	○	○	104
○	○		○	○	○	99
○			○	○	○	53
○	△	△	○	○	○	30
○	○	○	△	△	△	8
○		○	○	○	○	8
			○	○	○	6
○	△		○	△	○	4
○	○		△	△	△	4
	○		○	○	○	4
○	△	△	○	△	○	3
○	○		○		○	3
○			○		○	3
○	△	△	○	△	○	3
	△	△	○	○	○	2
	△	△	○	○	○	2
○			○	△	△	2
○	△	△	○	△	△	2
○	△		○	△	△	2
			○		○	1
○	○	○		○	○	1
	○	○	○	○	○	1
○	○	○	△	○	△	1
○	○		△	○	△	1
○		○	△	○	△	1
○		△	○	△	?	1
○	○			○	○	1
○	○	○	△	△	○	1
○			○	○		1
○	○	△	△	○	○	1
○		○	△	△	△	1
○		△	○	△	○	1
○	○	○	△	○	△	1
○	○	○	○	○		1
○	△	△		○	○	1
○	○	○	○	△	△	1
○			△	○	△	1
				○	○	1
○	△	△	○	△	△	1
○	△	○	○	△	○	1

以上から概略判断できるのは、ヴェネツィア本、ヴァティカン本、カルコプラティア本は総主教座本に近く、パリ本はこれらとやや異なるカレンダーを採用し、十字架本の暦は総主教座のものとは大きく異なっているということであろう。十字架本のモノグラフを書いた J・C・アンダーソンは、カレンダーの特異性に言及してはいるが、『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』や『大教会のティピコン』といった大型暦と比較している

ため、十字架本の特性を浮かび上がらせることに成功していない(10)。マイナーな聖人に異同があるのならまだしも、聖母神殿奉献（通例 11 月 21 日が 11 月 20 日）、洗礼者ヨハネ誕生（通例 6 月 24 日が 6 月 25 日）といった重要な祭日が異なっている。十字架本は、しばしば通常の暦より 1 日早く、あるいは 1 日遅く祭日を祝うが、少なからぬ日においてまったく無名の特殊な聖人を挙げている。本稿で分析した写本の中ではパリ本が十字架本に比較的近く、163 日において同一の祭日を有している。

ヴェネツィア本、ヴァティカン本、カルコプラティア本は総主教座本に近いグループをなす。3 写本は 317 日において一致しているが、そのうち 19 日は総主教座と異なるカレンダーを採用している。これは総主教座と別の聖人を挙げるのではなく、総主教座が挙げない聖人を加える形であることが多い。すなわち 4 写本はいずれも『大教会のティピコン』ないし『コンスタンティノポリスのシナクサリオン』の圏内に収まり、聖人の取捨選択に多少の幅があるという程度である。ヴェネツィア本とヴァティカン本が一致するのが 325 日、ヴェネツィア本とカルコプラティア本の一致は 345 日、ヴァティカン本とカルコプラティア本の一致は 334 日で、この差はほとんど有意ではない。写字生が明らかに誤記をした箇所も見受けられる。

総主教座本は以下の 11 日において、聖堂の献堂 encainia を祝っている。

- 9 月 13 日　エルサレムのキリスト復活聖堂（聖墳墓聖堂）(11)
- 9 月 21 日　Petra の聖母聖堂(12)
- 10 月 31 日　総主教座の聖母聖堂(13)
- 11 月 4 日　Kyrou の聖母聖堂(14)
- 11 月 5 日　Sphorakiou の聖テオドロス聖堂(15)
- 12 月 1 日　宮廷附属聖堂
- 12 月 18 日　Chalkoprateia の聖母聖堂(16)
- 12 月 22 日　アギア・ソフィア大聖堂の開堂（アニクシア）
- 12 月 23 日　アギア・ソフィア大聖堂の献堂
- 5 月 1 日　ネア・エクリシア(17)
- 8 月 31 日　Chalkoprateia の聖母聖堂への聖母の腰帯安置と献堂

これと同じ献堂祭日を有するのはヴェネツィア本のみである。ヴァティカン本、カルコプラティア本がともに祝うのはこのうちの 9 月 21 日、11 月 4 日、12 月 22・23 日、8

月 31 日で、カルコプラティア本はさらに 9 月 13 日、5 月 1 日の encainia も採用する。カルコプラティア本が 12 月 18 日カルコプラティアの聖母聖堂献堂を祝わないのは奇妙であるが、他の聖堂・修道院で使用するための注文であったかも知れない。

ヴァティカン本とヴェネツィア本の性格の近さを指摘し、両写本が一種のペアであった可能性を指摘する研究者もいる(18)。両写本の暦は 325 日一致しているが、ヴェネツィア本はカルコプラティア本とは 345 日というより高い確率で一致している。ヴェネツィア本が総主教座本の encainia を 11 日すべて採用しているのに対して、ヴァティカン本は 5 日採るのみに過ぎない。この点からも、ヴェネツィア本がヴァティカン本の対として構想されたのではあり得ない。

コロフォンのない写本の制作地についてこれまでは、挿絵や彩飾の豪華さ、洗練から、漠然と「首都コンスタンティノポリス制作」という仮説が唱えられてきた。しかしたとえばキプロスといった遠隔地(19)はさておいて、我々は帝国各地の様式を実は知らないのである(20)。聖者暦の検討は、写本制作地に関する新しい視点を我々にもたらしてくれる。聖者暦中に、首都で執りおこなわれる典礼の指定が多数記されていれば、その写本は確実に首都において、首都のパトロンのために制作されたものである。総主教座本は言わずもがな、ヴェネツィア本、ヴァティカン本、カルコプラティア本はいずれも多数の首都典礼を記録している。しかしパリ本、十字架本に採用される首都の典礼はそれに比して多くない。新年 9 月 1 日のカルコプラティアにおける聖母のシナクシスは全 6 写本が採るが、アギア・ソフィアの開堂（12 月 22 日）をパリ本、カルコプラティア本は採録せず、パリ本が同献堂（12 月 23 日）のみを祝う。7 月 2 日聖母の衣安置は 6 写本が採る。8 月 16 日は十字架本を除く 5 写本が「聖顔布（マンディリオン）の帰還とサラキノン Sarakenon(21)への到着」を記念する(22)。8 月 31 日「聖母腰帯のカルコプラティアへの安置と献堂」は 6 写本が採録する。パリ本はまだ首都と直接に関わる祭日を 5 日載せているが、十字架本は 3 日のみで、そのすべてが聖母マリアに関わる典礼である。十字架本の挿絵、とくに福音書記者像が優れた首都の作であることは疑いを容れないが、パトロンは首都以外の、聖母に関わる聖堂・修道院であった可能性を想定したい。

以上簡単に分析した聖者暦は、レクショナリー写本研究の片翼である。挿絵の図像学的研究、プログラムの解明と相俟って、写本の全貌は我々の前に現れるであろう。今後聖者暦に関しては、データを集積した上で、いくつかのリセンションを確定することを目指したい。

注

(1) 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』50-3（2005 年 3 月）、印刷中。

(2) オシオス・ルカス修道院のモザイク装飾と聖者暦の関係について、海老原「オシオス・ルカス修道院主聖堂の聖人像プログラム」『美術史研究』41(2003), pp.81ff.参照。

(3) 一例として、コンスタンティノポリスにおけるアギア・ディナミス聖堂の活動に関する発見を挙げる。益田「序説」（註 1）参照。

(4) 文献については益田「ビザンティン・レクショナリー写本研究の諸問題」『ビブリア』105（1996 年 5 月）、註 48-66 を参照。ベナキ本を除いた 17 写本については、Masuda, Εικονογράφηση του χειρογράφοθυ αριθ.587 της μονής Διονυσίου στο ΄Αγιο Ορος – Συμβολή στη μελέτη των βυζαντινών ευαγγελισταρίων, diss., Thessaloniki University, 1990, pp.213-44 に挿絵のリストを収録したが、マイクロフィルム等の形でも未見の写本が少なくない。上記 3 点以外に、これまでに益田が公にしたレクショナリーに関する研究は、以下の通り。「ディオニシウ・レクショナリーの受難週挿絵における典礼的性格」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 別冊第 18 集 文学芸術編 1991 年, pp.103-112 ;「ディオニシウ・レクショナリーの寄進者 ― 十一世紀コンスタンティノポリスにおける女性のパトロン活動」『美術史研究』30(1992), pp.51-66 ;「ビザンティン写本挿絵におけるヨハネ福音書冒頭部分の絵画化」『美學』172(1993), pp.12-22 ; "Picturization of John 1:1-18 in Byzantine Manuscript Illustration," *AESTHETICS* 6(1994), pp.59-72 ;「天理図書館所蔵のビザンティン・レクショナリーについて」『ビブリア』103（1995 年 5 月）、pp.198-175 ;「ビザンティン皇帝アンドロニコス二世のレクショナリー」『鹿島美術研究（年報別冊）』13(1996), pp.132-40 ;「イワン・ドゥイチェフ研究所（ブルガリア）のビザンティン・レクショナリー」『女子美術大学研究紀要』31(2001), pp.1-10.

(5) J. Mateos, Le typicon de la Grande Eglise, 2vols., Roma 1962-63. マテオスは年代の異なる 4 写本を校訂しているが、すでに 4 写本間でも聖人の選択が同一でない。

(6) かつて益田は「天理図書館所蔵のビザンティン・レクショナリーについて」pp.191-187 において、『大教会のティピコン』との比較を行ったが、有意な結果を得られなかった。「諸問題」pp.217-213 では総主教座本との比較を改めて試みた。

(7) H. Delehaye (ed.), *Synaxarium ecclesiae Constantinopolitanae*. Propylaeum ad acta sanctrum Novembris, Brussels 1902. ビザンティンの聖者暦に関する諸問題については、以下参照。Id., *Synaxaires byzantins, ménologes, typica*, London 1977.

(8) N.P. Ševčenko, *Illustrated manuscripts of the Metaphrastian Menologion*, Chicago, 1990.

(9) 本来ならこれが総主教座のレクショナリーであることを実証する手続きが先決であるが、なお追加調査が必要な部分があり、追って新稿を用意したい。本稿では、これが総主教座レクショナリーであることを所与の事実として議論を進めることをお許しいただきたい。

(10) J.C. Anderson, *The New York Cruciform Lectionary*, Pennsylvania 1992, pp.41ff..

(11) G. Vikan, s.v. "Sepulchre, Holy," *ODB*, p.1870.

(12) R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. 1er partie: Le siege de Constantinople et le patriarcat oecuménique, t.III, les églises et les monasteres*, Paris 1969, p.223.

(13) *Ibid.*, p.217.

(14) *Ibid.*, pp.192f..

(15) *Ibid.*, pp.152f..

(16) *Ibid.*, pp.237ff..

(17) *Ibid.*, pp.361ff.; P.Magdalino, "Observations on the Nea Ekklesia of Basil I," *JÖB* 37(1987), pp.51ff.; C.Mango, s.v. "Nea Ekklesia," *ODB*, p.1446.

(18) M.-L. Dolezal, The Middle Byzantine Lectionary: Textual and Pictorial Expression of Liturgical Ritual, diss., University of Chicago, 1991.

(19) 一群の写本について、以下を参照。A. Weyl Carr, *Byzantine Illumination, 1150-1250: The Study of a Provincial Tradition*, Chicago 1987.

(20) 首都から遠からぬビティニア制作の写本に関するフッターの問題提起を参照。I.Hutter, "Scriptoria in Bithynia," in: C. Mango, G. Dagron (eds.), *Constantinople and its Hinterland*, Aldershot 1995, pp.379ff..

(21) R. Janin, *Constantinople byzantine*, Paris 1964, p.422.

(22) 奇妙なことに、『大教会のティピコン』は、この祭日を記念しない。Mateos, *op.cit.*, vol.1, pp.372-77.

本稿は平成 16 年度科研費補助金　基盤研究 C-(2)「ビザンティン典礼用福音書挿絵の総合的研究」の成果の一部である。